

# 優秀賞

## ぼくの銀メダル

小豆島町立星城小学校四年 湊 真帆稀

ぼくは、一年生の時からロードバイクが大好きで、毎日のようにお父さんと練習をしています。三年生までは、お父さんのせ中进行を追いかけることに必死でした。四年生になると少しづつ足に力がついて、遠かったお父さんのせ中がだんだんと近づいてくるようになってきました。そして、ついに、お父さんをおいぬくことができました。お父さんは、「速くなったな。もうお父さんが、まほきを追いぬくことはできないだろうな。」

と言ってくれて、ぼくはうれしかったです。また、お父さんよりも速く、ロードバイクで走れるようになって、お父さんとずっと一緒に走りたいなと

思います。なぜなら、きつい坂道や長いきよりをお父さんと走っていると、お父さんもがんばっていると思えて、体の中から力がわいてくるからです。

春から夏にかけては、ロードバイクのレースがたくさんあり、自分が戦いたいレースを選んでもうしこみます。ぼくには、自分の力を試すために毎年出場している、大阪での大会があります。今年も、出場しました。

大会の会場には、たくさんのお出場選手やレースの進行をする司会者がいたり、会場を盛り上げるための音楽がかかったりして何度出場してもみんなちようします。同い年くらいの選手でも、みんな強そうに見えて、今までたくさん練習してきたはずなのに、少し

不安になります。本番のレースが始まる前には試走といって、コースをロードバイクで自由に走ることができません。どこからラストスパートをかければ、勝てるかなどを考えながら走ります。試走をして、もどつて来た後もどきどきする気持ちは変わリませんでした。そんなぼくにお母さんは、「不安な気持ちも楽しもう。勝つても負けても何かを学べるよ。」

と言ってくれました。この言葉を言われて今は色々考えるよりも、自分を信じて楽しんで走ろうと落ち着くことができました。

いよいよレース本番です。出場選手がスタートにならび、カウントダウンが十秒前から始まりました。スタートのピストルが鳴り、走り出すときんちようしていた気持ちはふっ飛んでいきました。前を見て、勝つことだけを意識して走りました。六週するコースで、最後の一周でぼくがいた先頭集団は、ぼくをふくめて三人になり、三人が横

並びに走っていました。三人ともラストスパートをかけて走ります。息は苦しいし、つかれて足に力が入らなくなってきているのを感じました。その時です。毎日の練習で、お父さんのせ中を必死に追いかけていた自分のすがたが頭の中をよぎりました。その時と同じように心の中で、しっかりと自分に言いきかせました。

「負けたくない。力を振りしぼろう。」すると、ペダルをこぐ足にぎゅんとなが入りました。その場では分からないくらい、ほとんど同着で三人がゴールしました。ゴールした後、すごいかん声が聞こえてきました。その時やつと、ぼくは、このかん声の中を走っていたのだなと気付きました。

勝ったのか、負けたのかきんちようしながら結果発表を待っていると、「二位、みなと真ほき選手。一位とれい点三秒差でゴールです。」

と言われました。れい点三秒の差。ほんの少しの差で負けてしまいました。くやしい気持ちで少し泣きそうになり、放送の後すぐ行われる表しよう式にも

出たくないなと思っていました。すると、お父さんが

「よくがんばったな。負けてしまったけれど勝った選手には、はく手をおくらないといけないよ。それがスポーツだ。」

と教えてくれました。最後の一周は特にぼくもきつかったけれど、それは他の選手も同じはず。おたがいに、きつかった時を乗り越えたことをたたえ合おうと思ひ直しました。表しよう台では一番高い所に立つことはできず銀メダルだったけれど、気持ちは、結果を聞いた直後よりもすつきりしていました。見事一位になった選手には気持ちよく、おめでとうのはく手をおくりました。ロードバイクの楽しさがあらためて分かり、お母さんの言葉通り、負けたからこそ、学ぶことがあると思ひました。来年のレースでは、絶対に勝ちたいという気持ちがさらに高まりました。

あのレースであと、どれくらいペダルをふみこんでいたなら、勝つことができていたかな。ぼくに足りなかった

ものは何だったのかな。表しよう台でもらった銀メダルを見るとそんな思いがいつもわいてきます。レースが終わってからも、ぼくは来年に向けて、毎日お父さんと練習に取り組んでいます。後ろからお父さんの応援をきくとやつぱり、力がわいてきます。お父さんとの練習はこれからも続けていきます。次こそは、金メダルを目指して。